

文学教材の視点と物語り性

中村 愛人

(2001年9月28日受理)

Use of Point of View in Literary Works as Teaching and Learning Material

Yoshito Nakamura

Are literary works useful as teaching and learning material in English language education? To answer this question we have to define first what is literary and what is not. This is no easy task at all, but by examining point of view in a novel and a short story we will tackle the question somehow or other here.

Key Words: literary works, point of view, narrator, narrative

キーワード：文学作品、視点、語り手、物語り

I. はじめに

近年、英語の教科書から文学的な教材が減って来ている。いやそれどころか、教科書の中の文学作品を検証しようとしても、一冊のうちのどこを探しても見つからないものまで存在する。以前の教科書では、教科書によってその割合は様々ではあったが、必ず何レッスンかは文学作品がとられていたし、中には半ば近くを占めているといった教科書も存在した。色んな教材を使って学習するのが良いと言うことで、物語から科学的な記事のようなものに至るまで、幅広く教材が選ばれるようにはなったのは良いが、近年の状況はいささか極端ではないだろうか。

一体文学は英語教育には必要のないものなのか。むしろ現状は現状として、もっと文学作品の活躍の舞台を広げていくべきではないのか。

私たちが英語教育の教材として文学作品、例えば、小説や短編小説⁽¹⁾の全体ないしその一部を使用する時、一般の散文(論説文、説明文等)と比較してどのような違いがあるのか。効果に違いはあるのか。教え方、学び方次第で、どちらを使っても変わりはないのか。

ここで私たちは、文学作品と言ひ文学教材と言つても、文学とそうでないものとの違い、その境界など、非常に曖昧なものだと言うことに気づかされる。そもそも文学の文章とそうでない文章には、どのような違いがあるのか、それらの区別はできるのか。できると

すればどのようにすれば良いのであろうか。このような問題について、少しでも手掛かりを得られればということ考察したのが本論である。

II. 文学作品の言語

私たちの常識的思いには反するが、文学には文学特有の言語があるわけではない。

We believe that there is no such thing as literary language. When we say this, we mean that we find it impossible to isolate any single or special property of language which is exclusive to a literary work. It does not mean we deny that language is used in ways which can be distinguished as literary.⁽²⁾

つまり、文学特有の言語があるわけではなく、認められるのは、文学的な言葉の使用である。また、

...difficult to identify which texts are literary and which ones are not. This is probably because there is no specialised literary language which can be isolated and analysed in the same way as the language of specific fields, such as law; or specific media, such as newspapers.⁽³⁾

ここでも、例えば、法律の世界の用語とか新聞の表現等に類したものは、文学にはないだろうと言われている。詩等によく使われ、如何にも文学的と考えられる

比喩表現にしても、直喩(simile)にしる隠喩(metaphor)にしる、少し注意すれば、日常の言語にいくらでも見つけることができる。実際、文学というものは、どのような分野の表現をもとり込み得る、吸収力を持った柔軟で幅広いものであり、当然内容的にも同じ特徴を備えている。

しかし、私たちは確かにある文章を文学的と感じ、別の文章はそうではないと思う。一体何が違うのであろうか。

Ⅲ. 文学の表現と説明文

考察を進めるために、先ず、実際の文章を取り上げる。

London continued to burn coal and the pall of soot grew worse. On 27 December 1813 there was a fog so serious that the Prince Regent, having set out for Hatfield House, was forced to turn back at KENTISH TOWN. On the return journey, one of his outriders fell into the ditch. This fog lasted till 3 January 1814; and during this time the Birmingham mail coach took 7 hours to crawl as far westwards as UXBRIDGE. As the century passed, fogs became more frequent, the longest of all probably being that which began in November 1879 and lasted till March of the following year. Charles Dickens described fog as a 'London Particular': the opening chapter of *Bleak House* contains his description of the stricken city:

'Fog everywhere. Fog up the river, where it flows among green aits and meadows; fog down the river, where it rolls defiled among the tiers of shipping, and the waterside pollutions of a great (and dirty) city. Fog on the Essex marshes, fog on the Kentish heights. Fog creeping into the cabooses of collier-brigs; fog lying out on the yards, and hovering in the rigging of great ships; fog drooping on the gunwales of barges and small boats. Fog in the eyes and throats of ancient Greenwich pensioners, wheezing by the firesides of their wards; fog in the stem and bowl of the afternoon pipe of the wrathful skipper, down in his close cabin; fog cruelly pinching the toes and fingers of his shivering little 'prentice boy on the deck. Chance people on the bridges peeping over the parapets into a nether sky of fog, with fog all round them, as if they were up in a balloon, and hanging in the

misty clouds.'⁽⁴⁾

少し長い引用になったが、有名なロンドンの霧について、そのひどい状況を、そのために実際に起こった出来事の説明と合わせて、19世紀イギリスの代表的小説家ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の作品の一部を使って説明したものである。この前半部は説明文、後半部の引用部分は小説の一部つまり文学作品の文章と言うことになる。この両者を比較してどのようなことがわかるだろうか。

前半の文章では、ロンドンの霧の状況について、ある時の注目すべき出来事を、それはどのように、いつどのくらいの時間がかかったかも含めて説明し、更に、後の時代には更に悪化したことが、特に取り立てて言うほどの特徴もなく、かと言ってそれほど単調な文でもなく普通に述べられている。後半の引用された文章になると、とたんに語彙も豊かになり、難しくもなっているが、同時に、文にリズムが顕著になり、その勢いのある流れに乗って迫力を増している。しかし、この様に、両者の文の違いを印象的に言うことはできるが、決定的な必要十分条件としての特質の違いはあるのだろうか。

次に同じ霧についての別の百科事典の記述も参照しよう。

When fog shrouds an area, it envelops everything in a gray or yellow vapor. The United States Weather Bureau calls a fog that obscures objects at a thousand feet or less a *dense fog*. Other fogs are called *light*. Unless radar aids are available, in a dense fog ships and aircraft must move very cautiously or not at all ...

Some airfields maintain systems for burning away fog, but they are costly to operate.

Fog, like dew and clouds, comes from the moisture in the air. The moisture condenses and gathers around microscopic bits of dust to form fog particles. Each particle is less than 1/25,000 of an inch in diameter. In dense sea fog there may be 20,000 of these particles in one cubic inch. Even far out at sea there are enough bits of dust in the air for fog formation.⁽⁵⁾

ここでは、霧について、その種類、影響、発生のメカニズム等が説明されている。これは、語彙は必要なものだけ、文も特に複雑なものではなく、百科事典に当然な曖昧さのないやさしい説明の文章と言えらるだろう。前述の文章と比べて、今度はかなり違いが感じられるのではないだろうか。ここで、それぞれの文章を、初めからの順序で、文1、文2、文3として論じること

にすると、文学作品らしさを印象的に言えば、文2、文1、そして文3の順序であろう。しかし、これまたその決定的な要因は何であろうか。

この三つの文章を更に検討する時、私たちは、違うものとして次の2点に気づくのではないだろうか。即ち、時間と流れ・動きである。既に述べたように文2ではもっとも流れが感じられ、次いで文1、文3の順であろう。時間については、文1には明確に年代が述べられ、その経過にも言及されている。次いで文2、文3ということになる。特に文3ではほとんど時間とかその経過と言うものを感じることはない。ここでもう一度文1と文2を見直すと、確かに前者の方が年代とかは明示的であり長い時間に渡っての記述となっているが、一方文2では、状況の変化が徐々に時間の経過と共に描写されて行く。文1を静的な時間の経過に従った記述とするなら、文2は動的な時間の流れに沿った描写と言うことができるであろう。そうすると順序は逆の方が良いことになる。この様に文学作品らしさの順序との一致からすると、この2点が、要因としてそれに大きく関わっていることは間違いないであろう。

それぞれの文にこれらの特質を生み出しているものは何か。ここで私たちは視点 (point of view) の問題に行き着くことになる。

IV. 視 点

小説の芸術性にとっての視点の重要性を初めて指摘し、それを作中人物の一人 (視点人物) に統一すべきだと主張し実践して見せたのは、英米双方で活躍した小説家ヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916) であり、その後、彼の小説を使って小説の技巧としての視点を精細に分析して見せてくれたのは、ラボック (Percy Lubbock, 1879-1965) であった。

もちろん、視点そして作品の語り手 (narrator) というものは、話をする、物語をするという行為 (story-telling, narration) に伴って、言わば、人類の歴史が始まると同時に存在したはずであり、何ら目新しいものではない。簡単にその特徴を述べると、一人称の視点からの語りで、視点人物が語る物語は、日常生活の経験に近く親しみの持てるものであり、私たちはその人物と共に容易に話に入って行くことができる。三人称の語りでは、信頼できる全知の語り手や制限付きながらやはり安心して受け入れられる語り手によって、壮大な未知の世界に遊ぶこともできる。

ここで事例としてもう一組火・火事 (fire) についての文章を取り上げる。

Fire is a friend to man. Just stop and think of how many different ways fire helps to make life more comfortable or helps to produce things we need. You should be able to compile a long list....

On the other hand, if we don't take care, fire can be one of man's most dangerous enemies. It can get out of control and destroy vegetation and houses. People can be trapped and killed by fire. It is not something to play with or take lightly.⁽⁶⁾

火について、その有用性と危険性をやさしく述べた文章。使われている語彙も平易。視点、語り手は不明ながら、先生か誰か大人が、生徒か子供に語っている印象であろう。しかし、時間の経過より動きを感じさせるものはほとんどない。

Wind on the ridge had risen, and the flames were leaping higher into the night. While we watched them, we could see the flames climbing into the tree-tops and burning the pine needles. A little later, the fire in the underbrush and in the grass had almost died out; but in the tops of the pines it burned faster and brighter than ever.

"It's a crown-fire now," Irene said. "Look — the pine tops are burning!"

The sight we saw made us tremble. We were standing close to each other, holding each other. Irene's face was more flushed than ever, and her bosom rose and fell faster than it had in the road when I sprang at her from the tall grass.

"A crown-fire can't be stopped until it burns itself out," she said. "I'm afraid of crown-fires."⁽⁷⁾

こちらの引用は、20世紀アメリカの短編小説からのもので、視点は若者である「私」に置かれ、一人称の語りとなっている。これは明らかに前の文章と時間と動きにおいて違っている。短時間の出来事であるが、その経過につれて、火事が燃え広がる様子や若者と娘の樹冠火への恐れと同時に興奮している様子が、二人の気持ちまで含めて、書かれている以上に生き生きと伝わってくる。樹冠火と二人の感情が重なり同調しているかの印象さえ受ける。

火の有用性と危険性を述べた引用文と同様に、一般の文章においても、少なくとも何かを物語る限り、視点と話し手は存在する。それでは、私たちは、何故そのような文章を読む時に、その存在を意識しないのだろうか。それは、確固とした統一された視点がないためと考えられる。私たちは、視点が曖昧で視点人物が不明であったり、複数の視点人物が次々と変わってしまったり、明確なイメージを持つことができない。文

3の文章はまさにこの例であろう。視点はどこにあるのか、誰が語っているのか、一向にはっきりしない。文1についても、誰かが説明してくれているという感じはあるものの、それ以上ではない。これは先ほどの火についての文章も同様であろう。文2において、三人称の視点からの語りを通して、深い霧が周囲の物を覆い尽くして行く様が眼前に展開するのは印象を大きく異にしている。

小説において、私たちは、視点が定まり語りが始まると、自らをその視点に重ね合わせて作品の世界に入っていく。語りは物語を紡ぎ出し、うまく行けば、その物語の世界を自分のものとして体験する。上記のディケンズの作品からの引用では、雨による泥水が引いたばかりのロンドンの通り、そしてテムズ川、それらを広範囲に渡って覆い尽くす深い霧の描写から、読者は視界も覚束無いまま、いつしか導かれて作品の中心である大法官裁判所に行き着く。視点を通し、そこからの語りを通して、いつ終わるとも知れない訴訟地獄の世界を、主要人物たちと一緒に体験することになる、見事な作品の導入部である。

V. 文章の物語り性と文学らしさ

私たちは、このある一定の視点から語られる物語りに、そして語られた話の物語り性に、一部文学らしさを感じるのではないだろうか。

物語りにも、より物語的なものとそうでないものがあるであろう。それは、ある時間の経過とそれに伴う状況の変化を語ったもので、そこに生起する出来事間に葛藤や因果関係等何らかの関連を持つもの、更に語られたもの（表現）よりも読み取られたもの（体験）の割合の大きいものの方が物語り性が高いとまとめられる。⁽⁸⁾ これらは数量的に決定できるものではない。特に表現と体験の割合など曖昧さは否めないし、そのことも含めて、読者の性格、それまでの経験、興味・関心、その時の気分等にさえ影響されると考えられる。

私たちは、ある視点から語り手を通して語られた話の物語り性に一部文学らしさを感じると結論できた。一部と言ったのは、まだ他の要因、例えば表現の特徴等が考えられるからである。その考察は今後の課題とする。

VI. 視点と文章作法

これまで、作品ないし文章を読むという点から論を進めて来た。翻って、文章を書くという場合はどうであろうか。以前次の文章を読んでいて何かしら違和感

を持ったことがある。

教科書の物語り文に限らず挿絵はつきものである。しかし登場人物の顔、姿が絵として与えられているが故に、我々が「創造力」を働かさなくなってしまうたり先入観を与える弊害はあまり取り上げられたことはない。⁽⁹⁾

どこでそのような感じをもったのかと振り返って見ると、引用文の2、3行目と4行目は主語が違っている。それにもかかわらず、変わった主語が書かれていない。言い換えれば、いつの間にか視点が変わっていて、読者が一貫した読みができなくなっている。4行目を、「先入観を与える」ではなく「先入観を与えられる」としたなら、より読み易くなったと考えられる。こんな所にも、視点の問題が関わり重要な役割を果たしていることがわかる。

英語の文章の書き方の本に次のようなことが言われている。“Make sure the reader knows who is speaking.”⁽¹⁰⁾ 話し手が誰かをはっきりさせること、そうしないと読者の理解を妨げ余分な負担をかけることになる、と適切な指摘がされている。これまた、視点・語り手をはっきりさせるということと同様の考えと言えよう。また、コミュニケーションについての次の指摘も見受けられた。

The fundamental principle of good communication is that when you are the Tx (Transmitter) you think in terms of your Rx (Receiver). You try to see everything from his point of view.⁽¹¹⁾

ここでのコミュニケーションとは、書名からもわかるように、話すことと書くことの両方を意味している。ここでも期せずして視点という言葉が使われ、聞き手ないし読者の立場になって話しあるいは書くことを勧めている。それが十全なコミュニケーションの基本原則だと言っている。

VII. おわりに

以上の考察を通して、平凡ながら、表現する場合、理解する場合の両方において、文章の視点をできるだけ統一し明確にする、あるいは明確に意識することが重要であると結論付けることができる。そして、文学作品は、その特徴を顕著に備え、学習者に意識化させることのできる教材として、充分利用に値するものと言いうことができるのではないだろうか。

注

(1) 文学作品としては、小説や短編小説だけではなく、

詩や劇も当然考えられるべきであるが、ここでは、散文ということと、文学ではない一般の文章に近いものとしてこの二つに限定して論を進めることにする。劇はどうかと言うと、極端に言えば、劇の会話とト書の関係は、小説の会話と地の文の関係の割合を逆転させたものとも考えることもできるのでこの二つに含める。また、イギリスの14世紀の詩人チョーサー（Geoffrey Chaucer）の『トロイルスとクリセイデ』を二人の恋人の心の綾を見事に描いている等その特徴から韻文の小説と言う評も可能であるが、あくまでそれは譬えて言えばと言うことであろう。因に、一般的に小説の定義は様々にされていて、そのこと自体唯一の定義が不可能だということを教えてくれるが、散文であることを要件にすることはほぼ一致している。例えば、OEDの小説（novel）の定義は以下のようになっている。

NOVEL: A fictitious prose narrative or tale of considerable length (now usually one long enough to fill one or more volumes), in which characters and actions representative of the real life of past or present times are portrayed in a plot of more or less complexity. (下線筆者)

(2) C.J.Brumfit and R.A.Carter, eds. *Literature and Language Teaching*, (Oxford Univ. Press, 1987),

p. 6.

- (3) Gillian Lazar, *Literature and Language Teaching*, (Cambridge Univ. Press, 1993), p. 6.
- (4) Ben Weinreb and Christopher Hibbert, eds. *The London Encyclopaedia* (Macmillan, 1984), pp. 287-288.
- (5) *Compton's Encyclopedia*, vol. 10, (F. E. Compton Company, 1977), p. 286.
- (6) Rhodri Jones, *New English Third*, (Heinemann Educational Books, 1985), p. 20.
- (7) Erskine Caldwell, "Crown-Fire", *A Curtain of Green and Other Stories*, Kazushi Kuzumi, ed. (Kinseido, 1992), p. 5.
- (8) この点については、ジェラルド・プリンス著 遠藤健一訳『物語り論の位相—物語の形式と機能—』松柏社1996の記述が参考になったが、例文などの考察も踏まえ、自分なりの考えを加えてまとめてみた。
- (9) 『楽しい英語授業』vol. 14, 明治図書、1998, p. 34.
- (10) William Strunk Jr. and E. B. White, *The Elements of Style*, 4th ed. (Allyn and Bacon, 2000), p. 76.
- (11) Peter Little, *Oral and Written Communication*, (Longman, 1982), pp. 10-11.